

## 北セレベスの農村と農業

誌名	農林業問題研究
ISSN	03888525
著者	目瀬, 守男
巻/号	15巻3号
掲載ページ	p. 137-138
発行年月	1979年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 北セレベスの農村と農業

(3)

目 瀬 守 男

(1)

昨年夏に引続き今年の9月にも再度インドネシア北部のセレベス島を訪れる時期がやってきた。出張の目的は、日本学術振興会の要請で帰国留学生の現地研究者を継続的に研究指導し、併せて共同研究を実施することにある。訪問先のサム・ラチュランギ大学はセレベス島の最北端メナド市にある。メナドといえは戦争経験者の方には記憶があると思われるが、第2次大戦初期日本の落下傘部隊が始めて降下したところである。島のところどころに旧日本軍の地下壕が残っているが、それも歴史の1コマに過ぎなくなっている。

(2)

セレベス島の面積は約19万km<sup>2</sup>でわが国の面積の約半分、インドネシアの総面積の10分の1を占めている。研究対象である北セレベス州は、セレベス島にある4つの州の中の1つで、面積25,786km<sup>2</sup>、1976年の人口は193万人である。この地域の大きな農業問題は年率2.5%の人口増加および食生活の高度化にいかん食料生産を対応させるかにあり、われわれの研究課題が農村開発やヤシ園経営の合理化問題にあることも、これらの現地の食料事情と密接に関係している。

しかし現地の社会システムを、わが国のそれと対比してみると、明治時代から現在までの社会が混在しているようであり、日本の自動車や電気製品などの工業製品があふれているメナドの街を見れば現代のわが国の中小都市を思い出す。しかし一歩農村に入ると、自給自足的な農業、肥料や農薬などを使わない役畜段階の農業が展開し、またイリゲーションやマーケティングシステムの不完全な社会がある。もちろん一部には近代的技術を取り入れた植栽企業農業も点在しているが、それは現地の農家の先駆的モデルとはなり得ない存在である。

ところで北セレベス地域にはヤシ園を中心に農用地が36万9千haあり、そこには自給自足的な家族経営と植栽企業農業の2つのタイプの経営がみられる。1973年の資料によると、伝統的な家族経営は217,690戸あり、1戸当り農用地面積は1.62ha、インドネシアの平均1haより大きい。一方植栽企業農業は、102あり、1経営体当り166.2haの農用地規模を有している。しかし本地域の植栽企業農業はインドネシアの平均1,235haに比較すると規模が著しく小さい。

写真1は北セレベス山村の集落 (desa, village) の全景を示したものであるが、北セレベスにはこのような集落が1,165あり、行政の最末端として位置づけられている。北セレベスの行政機構としては、4つの郡と3つの市からなっているが、その下に85町村、1,165集落から成り立っている。特に農村開発問題を考える時の単位は集落であり、1集落の平均農家戸数は187戸、非農家を含んだ1集落当り人口は1,657人、面積は22km<sup>2</sup>である。



写真1 セレベスの山村集落

セレベスの集落は、自然的条件や社会的条件の差異によってそれぞれ発展水準は異っている。われわれが集落を訪れて印象に残ったことは、道路巾が広いということ、そのために集落がゆったりした空間を構成していて、オランダ領時代に行われた農村改造の成果として目に映る。建物の良し悪しは別として日本の農村に見られぬ空間的なゆとりが感じられる。

印象的な事柄の2つめは、各集落の入口に3つのタイプの標識がみられたことであった。それは desa swadaya (自立できない伝統的集落)、desa swakarya (過渡的集落) および desa swasembada (自立可能な発展集落) などであった。このような集落分類は、政府の

農村開発総局により、10の標準指標にもとづいて行なわれている。すなわち、標準指標としては、人口、自然の状態、活動状況、生活手段、集落の産出、伝統的な習慣、教育・技術、公共施設、共同の状態、集落の下部構造などである。北セレベスでは、1,165集落のうち37.25%が伝統的集落、48.07%が過渡的集落、14.68%が発展集落として指定されており、集落の発展段階に対応した開発施策が行なわれているのである。

## (4)

北セレベスの総人口の約80%が農村集落に住み、人口の65.5%が農業に就業しているが、本地域を代表する農産物はココナツ（ヤシ）であり、ヤシ園は全農用地面積の実に61.5%、22万8千haに達している。そしてココナツを含め、チンケイ、ナツメグ、コーヒー、ココアなどの工芸作物は29万2千ha、これらが本地域の主要な移出商品作物となっている。写真2でもみられるように平坦地でも傾斜地でも約4万haある水田以外はほとんどヤシ園になっている。

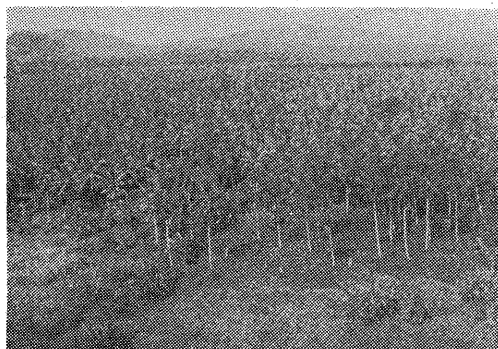


写真2 平坦地ヤシ園

食用作物としては、水稻、陸稻を中心に、コーン、キャサバ、スイートポテト、豆類、野菜、果樹などが栽培されているが、写真3、4で見られるように、水稻以外はほとんどヤシ園の下で粗放的に栽培され、とくに不足する米以外は地域内で自給されている。すなわちヤシ園における作物生産システムは、いわゆる混合栽培システムをとり、ヤシの下にバナナやその他工芸作物、食用作物などが混在して栽培されているのである。

また水稻についてみると、水田面積の約70%が2毛作で、水・陸稻の平均10a当り収量は319kgと著しく低位にある。この低収量の原因は、肥料使用農家がわずか10%程度にしか過ぎないことや、イリゲーション・システムの不備、技術水準の低さなどにある。さら

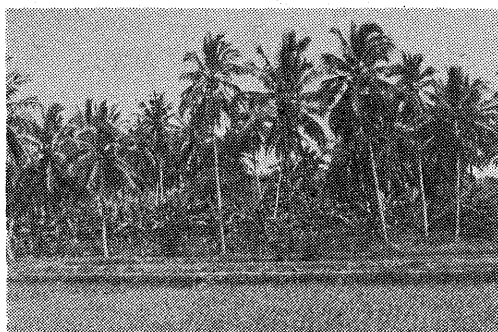


写真3 ヤシの下で栽培されているバナナ



写真4 バナナの下で栽培されている陸稻やトウモロコシ

に水稻生産農家の約60%が分益小作農であり、収穫量の4分の1が小作料として地主に支払われている。

本地域で水稻生産が本格的に行なわれるようになったのは第2次大戦の日本の占領時代からであるといわれ、現在では水田面積の拡大が地域農業の大きな課題となっている。

次に家畜についてみると、ヤシ園の下で飼養されている役肉牛を中心に、豚、にわとり、あひるなどがいるが、いずれも粗放的な飼育が行なわれている。今後家畜の改良をどうするか、ヤシ園の草地改良や飼料の貯蔵をどうするかなど多くの課題がある。

## (5)

以上北セレベス地域の農村や農業について紹介したが、農村や農業には改善すべき問題が山積している。これらの問題解決には日本の農業技術こそ現地に最も適していると思われる。したがって両国の学術交流の促進が急務であると考えられる。

（筆者・岡山大学農学部）